

崇学会だより

第16号

発行日 令和4年3月1日
発行所 崇学会事務局
〒860-0082
熊本市西区池田4丁目2番1号



崇城大学
学長 中山峰男

教職に携わっておられる崇学会会員の皆様には、ご健勝にてご活躍のこととお喜び申し上げます。また、2021年は前年から続くコロナ禍が当初の予想以上に長期化する中で、平時以上に大学運営への多大なご協力・ご尽力を賜りました。心より御礼申し上げます。

また、新型コロナウイルスの新たな変異株が発生するなど、感染症の収束に向けては、一歩進んでは半歩下がるような、未だ予断を許さない状況にあると言えます。まだまだ先行きの予測がつかない要素が多く存在しています。会員の皆さまもいろいろとご苦労されていることと存じます。

今般のコロナ禍において、本学では、新型コロナウイルスの感染状況とワクチン接種に伴う社会情勢の変化、政府から発出される様々な措置等の動向を踏まえつつ、教育効果を十分に考慮した上で、対面授業と遠隔授業を効果的に組み合わせながら、新年度においてもキャンパスに在学生の皆さんをお迎えし、対面での学修活動やさまざまな学生交流をはじめとする充実したキャンパスライフを提供できるよう努力してまいりたいと考えております。

ちょうど2年前、突如として世界を襲い、現在もなお続いている新型コロナウイルスの感染拡大の長期化は、人々の生活様式、働き方・仕事の在り方を激変させ、社会全体のデジタルトランスフォーメーション（DX）を一気に加速させました。

大学教育におきましてもデジタル化の波は加速しています。現代社会の基盤技術になりつつある人工知能に関連した教育・研究の推進には、社会からの強い要請があり、大学にとっては喫緊の課題となっています。

本学でも、デジタル教育を浸透させるため、理工系総合大学のスケールメリットを活かし、現在、すべての学生がデータサイエンスに関する授業科目を履修することを可能にしたプログラムを展開していく予定です。データサイエンスがさまざまな分野で、新たな価値を作り出す可能性を持っているので、その基礎を身につけ、社会をよりよくするための人材育成に努めてまいります。

いま、大学を取り巻く環境は、益々複雑になっております。このような難しい状況の中から、新たな展開や発展を導くには、新しいことに挑戦し、変化し続けることです。

急速に変革する時代にあって、自ら考えて行動できる人材を育成することは、大学にとってやりがいのある、きわめて大事な責務であると考えています。本学がこの役割をしっかりと果たしていけるよう、教職員一同頑張っていきたいと思っております。今後ともご支援賜りますようお願い申し上げます。



情報学科棟1階にあるIoT・AIセンターの内部

教員として活躍する 先輩からのメッセージ

後輩達へ！ 教職への熱い志に応える
そこに機会を提供するのも OB の役割。



崇学会
会長 染村 俊浩
平成元年 電子工学科 卒
現・水俣高等学校 副校長

今年度、会長を務めさせていただいております染村です。コロナ禍の影響により、何らかの影響を受けられた方が少なからずおられることと思います。未だに安心できる状況ではなく、改めてお見舞いを申し上げますとともに、一日も早く安定した生活が遅れるようになりますよう心からお祈りします。

学校の現場では御存じのとおり、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け実施された一斉休校をはじめ、多くの教育活動に制限を受け、生徒の大切な学びと成長の機会を奪うことにつながりました。

そういった中でも授業を中心にしながら教育活動を進めてきました。生徒の反応は、自身の成果を発表する場を奪われたことに対する悔しさがありましたが、限られた状況の中でも自身ができたコトへの充実感を感じているようでした。生徒の逞しさに感動すると共に、日々の学びの積み重ねと、どのような状況でも生徒の学びから成長へつなげることが大切であると再確認しました。

また、新学習指導要領の施行、教育の情報化等をはじめ大きな変革の波の中にあります。特に ICT 活用においては、新たな「道具」が入ってきました。環境を整え、柔軟な発想の下にこの「道具」を如何に使うかが鍵となります。時代とともに教育を取り巻く環境は変化しますが、生徒の「学びと成長」というテーマは不変です。教職を目指す学生の皆さんには、多くの経験を積み、しなやかな発想を持ち、生徒の未来を見据えて自身ができることに「精一杯！」励む「先生」に成長されることを希望します。微力ながらそのお手伝いを少しでもさせていただければと思います。よろしくお祈りします。



崇学会
副会長 藤本 隆
平成二年大学院工学研究科修了
現・球磨工業高等学校 教頭

このたび、崇学会副会長を仰せつかりました藤本です。微力ではありますが、崇学会に少しでも貢献できるよう精一杯活動させていただきます。さて、ここ数年は自然災害やコロナ感染症の感染拡大等、未曾有の事態に直面し、今後も予測不能な状況です。本校では令和2年7月豪雨で被災した生徒も多く、生活が一変した生徒もいました。当初はその被害の大きさに愕然となりましたが、被災地にある工業高校として、授業を振替えて復旧ボランティアに全校生徒で取り組みました。その活動で、生徒達は作業の段取りや協調性を身に付け、そして郷土愛を育てる機会となりました。失ったものもありましたが、得たものも多かったと思います。現在、大学に在籍している学生のみなさんは、思い描いていたキャンパスライフを満足に送ることができず、歯がゆい思いをしているでしょう。しかし、そのことを嘆いても仕方ありません。まさに「ピンチはチャンス」。現状を受け入れ、できることの中から今しかやれないこと、やるべきことを考え、行動することが大切です。将来に備え、様々な経験を通して自身のスキルを高め、着実にステップアップしましょう。教育現場では、この2年間で学習指導や生徒指導が大きく変化しています。一人1台端末配置や校内wifi環境整備等、学習環境も様変わりしており、課題を抱える生徒や支援を要する生徒一人一人に寄り添う対応が求められています。確かに教師はたいへんな職業です。でも、教師の使命感や責任の重さと同じようにやりがいや達成感も感じられる職業です。ぜひ、一人でも多くの学生が生徒達の夢を叶える力を育成できる教師を目指して欲しいと思います。

情報学科 二年

長友 涼也 (高校・工業)

私が教員を目指したのは、高校の担任の先生のアドバイスがきっかけです。高校二年生の二者面談の際、私がどこの企業に就職するか悩んでいると、「ここ(工業高校)の教員になってみてはどうだ。楽しめるかはわからんが、やりがいはあるぞ。」と将来の道を広げるアドバイスをくれました。「やりがい」という単語に惹かれ、一度教員について詳しく調べました。調べるうちに勉強を子どもに教えることに魅力を感じ、教員を目指すようになりました。

先生は一つのアドバイスで私の人生を大きく変えてくれました。生徒と関わっていく中でその生徒に“やりがい”を見つけさせることができる先生のような教員にわたしはなりたいと考えています。

応用微生物工学科 二年

佐藤 里菜 (中学・理科)

私が教員を目指したきっかけは中学生の時の理科の教科担当の先生との出会いです。その先生の授業から理科の面白さを知り、多くの人たちに理科の面白さを知ってほしいと思いました。

しかし私にはテストにそこまで労力を費やす理由が見つからず、母の忠告にも耳を貸しませんでした。身近に中卒で働いている人がおり、そちらのほうが楽なのではとの思いもありました。高校に進学してからも勉強の習慣は身につかず、今もそれは変わっていません。

私のように勉強を自然に行うことが難しい子供に対し授業だけではなく復習や勉強の方法などを教え、学びのおもしろさやそれから得られることの大きさを伝える教師になりたいです。

ナノサイエンス学科 一年

井口 賢輔

私は教師になりたいという意思はない。しかし、教師はどのような仕事をしなければならないのか、またどのような能力が必要なのかなどを知りたいがために教職の科目を履修している。また、これから社会に出たとき、教科ではなくとも仕事を教えることの能力を高め、生かせるようにしたいと思ったのも理由の一つである。

教職サークルでは、教職の授業では足りないものを補強し、人に教えられるほどに理科を理解すること、ボランティアに積極的に参加し地域に貢献することをがんばりたい。

授業やサークルで教えるという技術を習得し、地域に貢献し、充実したサークル活動をしていきたいと思う。

ナノサイエンス学科 一年

四丸 里空 (中学・理科)

教師になろうと思ったきっかけは、私自身が勉強に対し非常に苦勞をしているからです。小学校から中学校に進学すると多くの方は「テスト勉強」を当然のように行います。

応用生命科学科 一年

田中 芽衣 (高校・生物)

私は高校時代に出会った先生と関わっていくうちに教員になることを目指しました。生物を担当していた先生の授業はとても分かりやすく、一の質問に十返してくるような先生でした。元々生物が好きだった私はどんどんはまっていき、私も生物を通して理科に興味を持ってくれるような授業をしたいと思うようになりました。また、授業作りや教え方、その他の事で苦悩されている先生を見て、教師という仕事は先生次第で質が変わってくるんだと感じました。だから私も生徒のことでたくさん悩み、生徒に近い存在でいられるような先生になりたいです。

応用生命科学科 一年

松野 栄里佳 (中学・理科)

私が教員を目指した一番の理由は、中学教師の母の影響です。幼いころから多忙な母を見てきて、なぜそこまでして教員をしているのか当時は理解ができませんでした。しかし、卒業式に生徒からもらう色紙や誕生日の貰う手紙、年賀状を見て、教員として母が生徒に与えていた影響は大きなものだったのだと実感しました。多感な時期に関わる大人の影響は生徒にとって大きいものであると思うので、生徒のことを考え行動する教員になりたいです。

応用微生物工学科 一年

市田 幸太郎 (中学・理科)

私が教員になりたい理由はたくさんありますが、2つ挙げると中学校の時の経験と教育界の問題を解決したいからです。中学校の時、私は英語が苦手でした。受験には英語が必須で先生と朝や放課後に長文を解きまくりました。そこで、1人の生徒だけのために勤務時間外でも教えてください、先生からしたら簡単な問題にも生徒のレベルに合わせて教えるということがとにかくうれしかったです。また教育界の問題として学歴の負の連鎖がありますが、生徒に勉強の楽しさを感じてもらい、生徒の夢をかなえられるような教員になりたいです。

～教職 なかま～

挑戦している活動を紹介します

毎週行っている小学生に対する学習支援ボランティアが、熊本県と熊本市から表彰されました。普段あまり経験をするのがない小学生への学習支援は、解く方法ではなく概念を教えるという点でとても新鮮であると同時に難しくもありますが、中学や高校に取り入れるべきと感じることが多く楽しいです。

現在は感染症の影響でボランティアをすることができずにいます。感染症が終息した後の子供たちの笑顔が楽しみです。



今回は、コロナ禍で試験に臨み、地元福岡県の中学校理科教諭に見事合格した生物生命学部応用生命科学科 4 年の森本諒（もりもとりょう）さんをご紹介します。

特集 時代を拓く 教職希望学生の挑戦 ～教員合格インタビュー～

—— 教員になろうと思ったきっかけはいつ頃だったのですか？

中学生の頃から教員になりたいと思っていましたが、はっきりと教員になろうと思ったのは高校生の時です。昔から人に何かを教えることが好きで、教員という仕事に興味を持っていました。明確に教員を志したきっかけは、高校 3 年生の時にお世話になった副担任の先生の影響です。受験期に本来なら休日にも関わらず学校に来て頂き授業や過去問の解説などをして頂きました。その先生に「教師とは、生徒の将来と一緒に考え手助けをし、ともに成長できるとてもやりがいのある仕事」だと言われ、素晴らしい職業だと思い教員になることを決心しました。

—— 専門課程と教職課程の両立で、毎日かなりの時間を実験と勉強に割く必要があったでしょう？

コロナウイルスの影響もあり、学内に立ち入ることが少なくなりました。授業もオンラインになったため、家で教職課程の授業を受けることができたので、そこまで多くの時間を授業に割く必要がありませんでした。そのため、この期間で採用試験の勉強に専念することが出来ました。卒業研究は、空いた時間に作業できたので両立できていたと思います。

—— 教職課程を学ぶ仲間たちとの雰囲気は、どのようなものでしたか？

教職の授業では、3~4 人で 1 つの授業を作りあげるなどのグループ活動がよく行われています。全員が教師になるわけではありませんでしたが、それでも、みんなで力を合わせて 1 つの授業を作るため、良い関係を築くことができ、お互いに教え合いながら学ぶ、良い雰囲気ができていました。

—— コロナ禍の影響で、試験対策で例年との違ったところや苦労したことはありますか？

通常は、5 月の教育実習で経験値を上げ、8 月の 2 次試験（模擬授業・面接等）に挑みます。今年は、コロナ禍で教育実習が延期となり、何も経験しないまま、採用試験を受けることが不安でした。また、過去の先輩方は、模擬授業や小論文の添削は、教育実習でお世話になった先生にお願いしたと聞いていました。しかし、今年はそのような事が出来ず、大学の先生方に授業以外でも手厚いサポートをしていただいたことが支えとなりました。



—— 教職の先生方の指導は、森本さんにとってどのような自信につながりましたか？

教職課程を履修している学生はとて多いですが、一つの理想像に私たちを近づける指導ではなく、それぞれの学生の良さを認めてくれるので、自信につながりました。また、色々な経験を積まれてきた先生方ばかりなので、話の幅が広く、視野や考え方が広がりました。

—— 「教えること」を今後どのように実践していきたいですか？

理科という教科は、生徒自身で答えを見つけることがとても重要な学問だと思っています。すぐに答えを生徒に教えるのでは無く、ほんの少し生徒に手を差し伸べ、生徒の思考を尊重しながら答えにたどり着けるような指導を実践していき、生徒一人ひとりしっかりと向き合っていきたいと思っています。